

## 「人の霊」(4)

### ベレーシート

●聖書の最高の教えは「霊の中に生きる」ことです。それは、霊とたましいとを見分けて、区別することができることを意味しています。また「霊の中に生きる」ことは、ベタニアのマリアのように御霊に属する人として「キリストの奥義」を悟ることでもあります。使徒パウロは以下のように述べて言っています。

【新改訳 2017】 I コリント人への手紙 2 章 14 節、3 章 1～3 節

14 **生まれながらの人間**は、神の御霊に属することを受け入れません。それらはその人には愚かなことであり、理解することができないのです。御霊に属することは御霊によって判断するものだからです。

- 1 兄弟たち。私はあなたがたに、**御霊に属する人**に対するようには語る事ができず、**肉に属する人**、キリストにある幼子に対するように語りました。
- 2 私はあなたがたには乳を飲ませ、固い食物を与えませんでした。あなたがたには、まだ無理だったからです。実は、今でもまだ無理なのです。
- 3 あなたがたは、まだ肉の人だからです。あなたがたの間にはねたみや争いがあるのですから、あなたがたは肉の人であり、ただの人として歩んでいることにならないでしょうか。

●ここには**三種類の人**が記されています。一つは「**生まれながらの人**」です。これはキリストを信じていない人のことで、御霊に属することが理解できない人です。もう二つはキリストを信じて神の御霊を受けている人で、「**肉に属する人**」と「**御霊に属する人**」です。「肉に属する人」とは、それまでの自分の肉(からだ)とたましい(知・情・意)に支配されている人のことで「キリストにある幼子」です。キリストがもたらしてくださった祝福が分からずに、自分の肉にしがみついている者たちです。一方「御霊に属する人」とは、すでにキリストがなされたことを信じて、上のものを求めている者たちのことです。それゆえ、神のうちに隠されているいのちを知り、キリストの奥義を悟ることができる者たちです。今回も前回、前々回に引き続いて「霊の中で聖書を読む」ということがどういうことであるかを知る訓練をしたいと思えます。以下の聖書箇所を読んで、聖霊がそこで指し示そうとしていることを見つけ出してください。答えが当たったとか間違ったとかで一喜一憂しないようにしましょう。なぜなら、御霊の示すことを、信仰をもって受け入れることができるかどうかが大切だからです。

### 1. 五千人の給食のしるし

【新改訳 2017】ヨハネの福音書 6 章 1～14 節

- 1 その後、イエスはガリラヤの湖、すなわち、ティベリアの湖の向こう岸に行かれた。
- 2 大勢の群衆がイエスについて行った。イエスが病人たちになさっていたしるしを見たからであった。
- 3 イエスは山に登り、弟子たちとともにそこに座られた。

- 4 ユダヤ人の祭りである過越が近づいていた。
- 5 イエスは目を上げて、大勢の群衆がご自分の方に来るのを見て、ピリポに言われた。  
「どこからパンを買って来て、この人たちに食べさせようか。」
- 6 イエスがこう言われたのは、ピリポを試すためであり、ご自分が何をしようとしているのかを、  
知っておられた。
- 7 ピリポはイエスに答えた。「一人ひとりが少しずつ取るにしても、二百デナリのパンでは足りません。」
- 8 弟子の一人、シモン・ペテロの兄弟アンデレがイエスに言った。
- 9 「ここに、大麦のパン五つと、魚二匹を持っている少年がいます。でも、こんなに大勢の人々では、  
それが何になるでしょう。」
- 10 イエスは言われた。「人々を座らせなさい。」その場所には草がたくさんあったので、男たちは座った。  
その数はおよそ五千人であった。
- 11 そうして、イエスはパンを取り、感謝の祈りをささげてから、座っている人たちに分け与えられた。  
魚も同じようにして、彼らが望むだけ与えられた。
- 12 彼らが十分食べたとき、イエスは弟子たちに言われた。  
「一つも無駄にならないように、余ったパン切れを集めなさい。」
- 13 そこで彼らが集めると、大麦のパン五つを食べて余ったパン切れで、十二のかごがいっぱいになった。
- 14 人々はイエスがなさったしるしを見て、「まことにこの方こそ、世に来られるはずの預言者だ」と言った。

### (1) 「湖・海」・「ガリラヤの湖」

●舞台はエルサレムではなくガリラヤです。ガリラヤには「湖(海)」(ヤーム:𐤆𐤓)があります。「湖・海」はこの世の象徴です。ガリラヤの海に象徴されるこの世での人々の問題は「飢え」です。病院にいる人も多いですが、スーパーで食料を求める人はそれ以上です。人は食物なしに生きていくことができません。ですから、サタンは公生涯に入る前のイエシュアに近づいて試みようとしてきました。

【新改訳 2017】マタイの福音書 4 章 1～4 節

- 1 それからイエスは、悪魔の試みを受けるために、御霊に導かれて荒野に上って行かれた。
- 2 そして四十日四十夜、断食をし、その後で空腹を覚えられた。
- 3 すると、試みる者が近づいて来て言った。「あなたが神の子なら、これらの石がパンになるように命じなさい。」
- 4 イエスは答えられた。  
『人はパンだけで生きるのではなく、神の口から出る一つ一つのことばで生きる』と書いてある。

●「それから」とは、イエシュアが洗礼を受けられた後です。イエシュアが御霊に導かれて荒野に上って行かれたのは、「悪魔の試みを受けるため」とあります。どんな試みなのでしょう。「荒野」は「ミドゥバル」と言われるように、「神のことばを聞く場所」「神のことばによって養われる所」という意味です。そこにイエシュアは導かれて、「四十日四十夜、断食をした」ことが記されています。「断食をする」とは、神のことばに専心して生きることを意味しています。イエシュアの地上での受胎から誕生、そして 33 年半の歩みはすべて、御国を建て上げるためです。特に公生涯が始まる洗礼から、受難と死と復活までのすべての言動が「御国」を証ししています。「四十

日四十夜の断食」も、御国のデモンストレーションです。それは「試みる者」であるサタンが近づいてきて「あなたが神の子なら、これらの石がパンになるように命じなさい。」と言ったことで明らかにされます。御国の証しとは、「人はパンだけで生きるのではなく、神の口から出る一つ一つのことばで生きる」ということです。御国が来ると「人は・・神の口から出る一つ一つのことばで生きるようになる」ということです。事実、イエシュアが御霊に導かれて神のことばによって養われたように、イエシュアの中へと信じる者は霊のからだを与えられてそのように生きる者となることを預言して、そのように言ったのです。

●イエシュアの洗礼は私たちの洗礼とは異なり、「最初のアダム」と「イスラエルの民」をすでに取り込んでいます。以下のイスラエルの民の歩みを踏み直しているのです。

【新改訳 2017】申命記 8 章 3 節

それで主はあなたを苦しめ、飢えさせて、あなたも知らず、あなたの父祖たちも知らなかったマナを食べさせてくださった。それは、人はパンだけで生きるのではなく、人は主の御口から出るすべてのことばで生きるということを、あなたに分からせるためであった。

●イエシュアが荒野の 40 日間で十分満たされたにもかかわらず「空腹を覚えられた」のは、生理的な現象ではなく、人を取り込んだ後であったことを知る必要があります。イエシュアが「空腹を覚えられた」のは二度あります。一度目は公生涯の最初の断食後、二度目は公生涯の最後でエルサレムに向かっている時です。いずれも、イスラエルの民(ユダヤ人)が神のことばによって養われていない、信仰の危機的な状況を言い表したことばです。今回のヨハネ 6 章にも同様のことが扱われています。

## (2) 「山に登り、弟子たちとともにそこに座られた」

●イエシュアが「山に登り」、「弟子たちとともにそこに座られた」にある「山」と「座られた」は、御国における重要なしるしです。マタイ 5 章 1 節にも「イエスは山に登られた。そして腰を下ろされると、みもとに弟子たちが来た」とあるように、冠詞付きの「山」(ハーハール:רְהָר)は御国のセンター(中心)となるエルサレムを象徴する場所として重要です。「座る」という動詞「ヤーシャヴ」(יָשַׁב)も、御国において主とともに「住む」ことが啓示されていて重要です。「五千人の給食」の奇蹟は御国の素晴らしい奥義が隠されていることを予感します。

## (3) 試される弟子たち

●イエシュアは大勢の群衆が来るのを見て、「どこからパンを買って来て、この人たちに食べさせようか」とピリポを試しました。イエシュアが語る内容はすべて御国についてです。そのことに弟子たちがどれだけ関心を持っているかを試しているのです。私たちも同様です。イエシュアが語ることは御国についてであり、そのことにいつも関心が払われているかどうかを問われているのです。もし私たちがたましいでそれを聞くなら、何の益も受けることはないのです。しかし霊で聞くなら御国のメッセージを理解でき、希望をもって語る事ができるのです。ピリポは答えます。「一人ひとりが少しずつ取るにしても、二百デナリのパンでは**足りません**」。そこで弟子の一人、シモン・ペテロの兄弟アンデレもイエシュアに言います。「ここに、大麦のパン五つと、魚二匹を持っている

少年がいます。でも、こんなに大勢の人々では、**それが何になるでしょう。**」

● 共観福音書と合わせると、以下のような流れが見えてきます。

① マルコ 6 章 38 節 「パンはいくつありますか。行って見て来なさい。」

彼らは確かめて来て言った。「五つです。それに魚が二匹あります。」

② ヨハネ 6 章 9 節 「でも、こんなに大勢の人々では、それが何になるでしょう。」

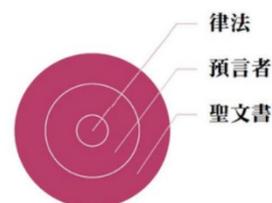
③ ルカ 9 章 13 節 「・・・私たちが出かけに行って、この民全員のために食べ物を買うのでしょうか。」

④ マタイ 14 章 16 節 「彼ら(=群衆)が行く必要はありません。あなたがたがあの人たちに食べる物をあげなさい。」

● 以上が試された弟子たちの答えです。すべて否定的です。なぜなら、イエシュアのことばをたましいで聞いているからです。イエシュアの語ることばは、「霊であり、またいのちです」(ヨハネ 6:63)とあるように、霊で聞く必要があるのです。正確には、**御国の福音の話として**霊の中で聞く必要があるのです。それが多くの実を結ぶ「良い地」(マタイ 13:8)なのです。心ではありません。霊です。「良い地」とは、人の霊とキリストの霊がともに働くところです。それ以外の場所では何の実も結べないのです。

#### (4) 「大麦のパン五つと、魚二匹」が意味するもの

● 「大麦のパン五つと、魚二匹」は、ユダヤ人の聖書(タナフ)です。「大麦のパン五つ」とは、イエシュアが「わたしが律法や預言者を廃棄するために来た、と思っはなりません。廃棄するためではなく成就するために来たのです」と言われた、モーセ五書のことです。それを「大麦のパン五つ」と表現しています。なぜなら、「大麦」は「初穂の祭り」に献げられるもので、「復活」を啓示しているからです。タナフの中で、「モーセ五書」(トーラー:תּוֹרָה)は祭司たちサドカイ派とパリサイ派両方にとって正典です。しかし「魚二匹」は「預言者」(ネヴィーイーム:נְבִיאִים)と「諸書」(ケトゥーヴィーム:סְפָרִים)を表しています。この二つはパリサイ派にとっては正典ですが、トーラーの参考書扱いです。サドカイ派はトーラー以外正典として認めていません。

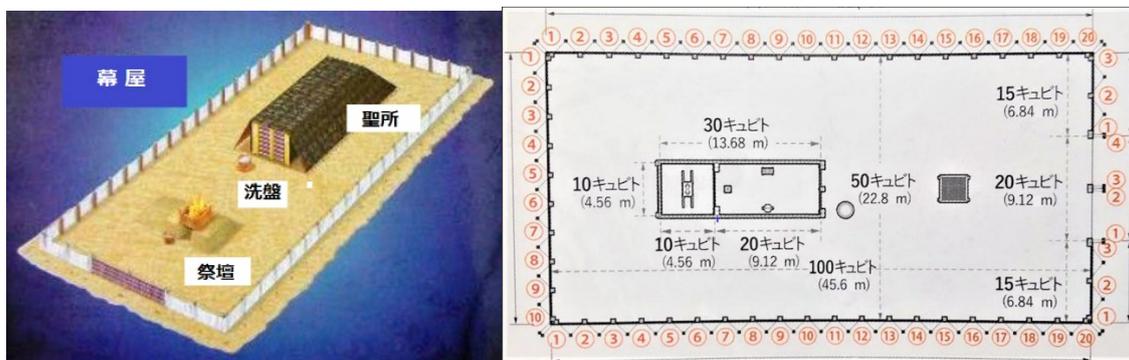


● ところで、「預言者」と「諸書」がなぜ「魚」にたとえられているのでしょうか。それは、その二つが単なる参考書的な位置付けではなく、トーラーに記されている神のご計画とみこころがイスラエルの歴史の流れの中でどのように具体化していくのかを預言しているからです。生きた魚は目に見える流れに逆らって泳ぐことが出来るように、神のご計画は実現するのです。「二」の数はそのことの証しです。しかも「魚」の語源の「ダーガー」(דָּגָר)は「増える」ことを意味し、神のいのちはますます豊かに増殖されるのです。

#### (5) 「五千人」

● なにゆえ、座った人の数が「五千人」だったのででしょうか。これは共観福音書とヨハネがこぞって記している数です。マルコでは「するとイエスは、皆を組に分けて青草の上に座らせるように、弟子たちに命じられた。人々は、**百人ずつ、あるいは五十人ずつまとまって座った。**」とあります。太字の百と五十の数は幕屋の外枠の寸法です。

北・南側が 100 キュビト、東・西側が 50 キュビトですから、「五千人」という数には神と人がともに住む幕屋が背景にあると考えられます。場所は、「寂しいところ」(ルカ 9:12)、「人里離れたところ」(マタイ 14:15、マルコ 6:35)と、いずれも「エレーモス」(ἔρημος)であることから、イエシュアがいつもそこで祈っていた場所、すなわち「荒野」(神のこたばを聞く場所)とみなすことが出来ます。荒野と幕屋は神と人との交わりの場所であり、そこに座るとは、メシア王国で神のパンにあずかることを意味します。そこはいのちの木そのものであるキリストを食べる場所です。



#### (6) 「余ったパン切れで、十二のかごがいっぱいに」

●12 節で「彼らが十分食べた」は「満腹になった」(サーヴァ:  $\text{מָלֵא}$ ) ことを意味します。パンは「大麦」であり、「大麦」は復活の象徴です。彼らは復活されたパン、すなわち復活されたイエシュアが与えるパンで満腹することになるという預言です。その後、イエシュアは弟子たちに「余ったパン切れを集めなさい」と命じています。「余った」と訳されたギリシア語は「ペリッセウオー」( $\text{περισεύω}$ )で「有り余る、残る」という意味ですが、ヘブル語にすると「ヤータル」( $\text{יָתַר}$ )の分詞となり、そこから名詞の「イエテル」( $\text{יֵתֶר}$ )が派生します。その意味は「残り物」という負のイメージではなく、その逆の「卓越・豊かさ」という意味があります。

【新改訳 2017】詩篇 17 篇 14 節

・・・あなたの蓄えで 彼らの腹は満たされ 子たちは満ち足り( $\text{מָלֵא}$ )  
その余り( $\text{יֵתֶר}$ )をさらにその幼子らに残します。

●主にある者の腹は豊かな食べ物で満たされ( $\text{מָלֵא}$ )、その子らも十分に食べ( $\text{מָלֵא}$ )、その幼子にも豊かに( $\text{יֵתֶר}$ )残されるのです。それは詩篇 23 篇 1 節にある「主は私の羊飼。私は乏しいことはありません」の預言的経験と同義です。「乏しくなる、不足する」を意味する動詞「ハーサル」( $\text{חָסַר}$ )が明確に否定されて、「ロー・エフサール」( $\text{לֹא חָסַר}$ )です。このことばを是非覚えたいものです。使徒パウロも「私の神は、キリスト・イエスの栄光のうちにあるご自分の豊かさにしたがって、あなたがたの必要をすべて満たして下さいます」(ピリピ 4:19)と記しています。「したがって」(カタ:  $\text{κατὰ}$ )とは「豊かさの中から」という意味ではなく、「豊かさにふさわしく、それに応じて」の意味です。そのようなみことばの恩寵を私たちはどれほど味わっていることでしょうか。

●主が与える「食べ物」は、食べたら無くなってしまいうというものではなく、食べれば食べるほど増し加わっていくというまことに不思議な「霊の食べ物」です。「彼らが集めると、大麦のパン五つを食べて余ったパン切れ

で、十二のかごがいっぱいになった」の「十二」は、**神の究極的な満足と喜びを表す祭司としての数**です。

ヨハネの黙示録にはその数と倍数がふんだんに啓示されています。すべて 12 の倍数なのです。

(12, 12+12=24, 12×12=144, 12×1000=12000, 144×1000=144,000)。

●ですから、この「**五千人の給食**」の話は、どんなわずかなものでも、どんなに小さなものであっても、私たちがそれを主に献げて行くなれば、主がそれを祝福して用いてくださり、有り余るほどの恵みと祝福となっていくという意味ではありません。そうではなく、イエシュアの与えるパンは、私たちに必要な永遠の養いのための「食べ物」であるということであり、決してわずかであっても無駄にしてはならない、尊く、卓越したものなのです。

## (7) 「世に来られるはずの預言者」

●「五千人の給食」の恵みに与った人々は、14 節で「まことにこの方こそ、世に来られるはずの預言者だ」と言ったとあります。ここでの「世に来られるはずの預言者」とは誰のことでしょうか。

【新改訳 2017】申命記 18 章 15 節

あなたの神、主はあなたのうちから、あなたの同胞の中から、**私のような一人の預言者**をあなたのために起こされる。あなたがたはその人に聞き従わなければならない。

●モーセが語った「私のような一人の預言者」とは、冠詞付きの「預言者」(単数「プロフェーテース」προφήτης)で、それは**イエシュアのこと**です。恵みに与った人々が「まことにこの方こそ、世に来られるはずの預言者だ」と判断したことはすばらしいことでした。ところが、人々はそのことを霊の中で受け取っていなかったために、後でイエシュアから離れ去っていくこととなります。まさに彼らの心は「土の薄い岩地」(マタイ 13:5)だったと言えます。さらに、「霊の中で聖書を読む」訓練として、もう一つの話を取り上げたいと思います。

## 2. 三十八年も病気にかかっている人の話

【新改訳2017】ヨハネの福音書 5 章 5～9 節

5 そこに、三十八年も病気にかかっている人がいた。

6 イエスは彼が横になっているのを見て、すでに長い間そうしていることを知ると、彼に言われた。

「良くなりたいか。」

7 病人は答えた。「主よ。水がかき回されたとき、池の中に入れてくれる人がいません。

行きかけると、ほかの人が先に下りて行きます。」

8 イエスは彼に言われた。「起きて床を取り上げ、歩きなさい。」

9 すると、すぐにその人は治って、床を取り上げて歩き出した。・・・

●イエシュアは多くの病人がいたにもかかわらず、なにゆえに「三十八年も病気にかかっている人」に声をかけたのでしょうか。まず「三十八年」が「しるし」となっているのです。

【新改訳 2017】申命記 2 章 14 節

カデシュ・バルネアを出てからゼレデ川を渡るまでの期間は、**三十八年**であった。それまでに、その世代の戦士たちはみな宿営のうちから絶えてしまっていた。主が彼らについて誓われたとおりであった。

●モーセは神が約束されたカナンのがどのような地であるかを探るために、12 の部族からそれぞれ一人ずつを選んで、斥候として遣わしました。選ばれた 12 人の斥候は 40 日間もかけてその地を探ったのです。エジプトから連れ出された民の中で、誰一人としてその地を見た者はいなかったのです。モーセ自身も然りでした。ところで、斥候たちの報告は、「そこはまことに乳と蜜が流れていて、すばらしく良い地だが、その地の民は力が強く、その町々は城壁があって、そこに住む民はみな背が高い者たちである」というものでした。この報告に基づいて、その地を占領することはとてもできないと言う者たちと、神が与えると約束したのだから必ず占領できるという者たちとに意見が二分しました。しかし必ず占領できるという者たちが殺されかけたため、イスラエルの民は 38 年間荒野をさまようことになってしまったのです。それが「**三十八年も病気にかかっている人**」ということばが意味する「しるし」です。単に一人のことではなく、不信仰な**イスラエルを代表する「しるし」となっている**のです。

●「**良くなりたいか**」というイエシュアのことばは、信仰を呼び起こす「**霊のことば**」です。「三十八年も病気にかかっている人」は肉的な現実について話しますが、イエシュアはその人の中に「**霊のことば**」を語ります。それが「**起きて床を取り上げ、歩きなさい**」ということばです。するとどうでしょう。その人は治って、床を取り上げて、歩き出したのです。まさに、「信仰は聞くことから始まります。聞くことは、キリストについてのことば(レーマ)を通して実現するのです」(ローマ 10:17)。霊の中でキリストのことばを聞くとは、理解の型紙をもった心(=肉)で聞くではありません。心で理解できないことでも、霊で聞いて信じることで、神の霊がその人に働きかけて奇蹟を起こさせるのです。信仰とはキリストのことばを霊の中で聞くことから生じるのです。たましい、心は曲者です。なぜなら、そこはサタンが足場を築いている場だからです。ですから心に従うなら、トマスのように信じることができなくなるのです。信仰は実に奥義的なのです。

●「**起きて床を取り上げ、歩きなさい**」というイエシュアのことばは、「**霊であり、いのち**」をもたらしことば(レーマ)です。このフレーズは「三つの動詞」による命令形で記されています。

### (1) 「起きて」

●「起きる」(エゲイロー: ἐγειρω)の現在命令形で、「キリストとともによみがえらされている」ことを信じ続けることが命じられています(ヨハネの場合、キリストの復活の視点から語られていることに注意)。ヘブル語訳の「クーム」(קוּם)は復活を意味する語彙です。

### (2) 「(床を)取り上げて」

●「取り上げる、持ち上げる」(アイロー: αἴρω)のアオリスト命令形です。これは一回的・主体的・自覚的に取り上げることを意味します。ヘブル語訳は「ナーサー」(נָסַר)、あるいは「ラーカハ」(לָקַח)が使われます。何を「取り上げる」のかと言えば、原文では「あなたの床」です。「床」は「眠る(死ぬ)」を意味する「シャーハヴ」(שָׁחַב)に接頭語がついた名詞「ミシュカーヴハー」(מִשְׁכָּבְךָ)で、「あなたの床」つまり「これまであなたを縛っ

てきた死の力」を象徴しています。その力を「ナーサー」(Νῆψ)するなら、神の力によってそれを「持ち上げ、取り上げる」を意味し、あるいは「ラーカハ」(Ἰρῆ)するなら、さらにキリストと一つに結びつくこと(結婚)を意味します。

### (3) 「歩きなさい」

● 「歩く」(ペリパテオー：περιπατέω)の現在命令形です。ヘブル語訳は「ハーラフ」(הלך)のヒットパエル態で、信仰による新たな歩みを促す命令となっています。「歩く」のヒットパエル態(הלך)は、自ら主体的に歩むことを示唆します(創世記 17:1)。「床」とは、彼を長い間縛り付けていた力の象徴です。イエシュアはそれを「取り上げて」、自ら新たな歩みをするを命じたのです。このことは、エジプトから出たイスラエルが不信仰という「床」を取り上げて、次世代の者たちが「立って」新たな道に歩いて「川を渡った」歴史を型とする、終わりの日の出来事の「しるし」です。

● 「床」は歩くことを妨げる死をイメージさせます。「床を取り上げる」とは新しいいのちにあずかるために、自発的に取り上げる(=取り去る)ことを意味します。それは私たちが自分の力で取り上げるのではなく、すでにイエシュアが「持ち上げ、取り除き、赦しておられる」ので、それを信じて新たに「歩む」ことが可能とされているのです。イエシュアの数々のことば(レーマ)に信仰をもって従うなら、神の奇蹟が起こります。不信仰によって約束の地カナンに入れなかった者たちを象徴する「三十八年の病人」こそ、イエシュアの復活のいのちによって生き返り、新たな歩みが可能とされることの「しるし」と言えますが、このことが民族的に起こるのはこれからのことなのです。しかしそれは必ず成ることを、この「しるし」が証しているのです。つまりそれは文字(もんじ)としての聖書ではなく、イエシュアによる「いのちを与える霊」によって新しく造られた者として生きることが預言的に啓示されているのです。

● 獣と呼ばれる反キリストが立ち上がる時に起こされる「イスラエルの残りの者」(14万4千人)こそ、「三十八年も病気にかかっている人」です。「恵みと嘆願の霊」(ゼカリヤ 12:10)が注がれた彼らは、イエシュアがメシアであったことを示されて激しく泣きます。その嘆きはエルサレムで起こります。彼らはイエシュアがメシアであったことを信じて立ち上がるだけでなく、イエシュアの語った「御国の福音」を全世界に宣べ伝えることで、すべての民族に証しし(マタイ 24:14)、その結果、「数えきれないほどの大勢の群衆」が救われることとなります(黙示録 7:9)。「三十八年間も病気にかかっている人」の癒やしは、このことを預言的に啓示する「しるし」なのです。エックレーシアに属する私たちも、キリストにあって「新しく造られた者」(Ⅱコリ 5:17)であることを意識する必要があります。そのためにはいつも「上にあるものを求める」必要があります。「上にあるもの」とは、死んでよみがえられて「神の右の座に着いておられるキリストにあるいのち」そのものです。そこにすでに「あなたがたのいのちは、キリストとともに神のうちに隠されている」(コロサイ 3:1~4)からです。やがて「キリストが現れる」時、「私たちもキリストとともに栄光のうちに現れる」(将来)からです。「キリストとともに神のうちに隠されている」私たちのいのちは、すでに完成されて、神によって守られているのです。

**三一の神が私たちの霊とともにおられます。**

2025.12.23(改訂)